

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4091500498		
法人名	株式会社 あすか介護サービス		
事業所名	グループホーム 三丁目のわが家		
所在地	〒836-0051 福岡県大牟田市諏訪町3丁目59番地 TEL 0944-41-4737		
自己評価作成日	平成29年01月23日	評価結果確定日	平成29年03月16日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号 TEL 093-582-0294		
訪問調査日	平成29年02月09日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

”一人ひとりの思いを大切に… よりやさしく より遅しく”を事業所の信条として、掲げています。
 ご利用者お一人おひとりの思い、スタッフ一人ひとりの思い(夢や希望、今こうしたいと思っていること、今感じていること)を大切に、ご利用者に対しても仲間に対しても「よりやさしく」を追求すると共に、自分自身の心の遅しさを育んでいくことで、人として成長し、一人ひとりが自己実現を達成できることを全力で応援していくことを法人の信条としております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

住宅街の中に小規模多機能施設と地域交流センターを併設した、少人数6人2ユニットのグループホーム「三丁目のわが家」がある。掃除が行き届き清潔で木の温もりを感じる生活空間の中で利用者は、やさしさに包まれた家族のように穏やかに過ごしている。少人数で利用者の思いを把握しやすく、安心感と笑顔の表情が溢れている。施設長と副施設長が看護師で小さな異常にも気づき、協力医療機関と連携して健康管理は万全である。職員は、介護を通して昨日より、今日は成長している自分を日々目標に切磋琢磨しており、チームワークで豊かな人間性の向上と質の高い介護を実践している。施設長と職員・家族とも尊重と信頼関係を構築しており、家族からも「ここを選んで良かった」という感謝と高い評価を得ている。地域交流センターでは、様々な行事を通じて地域住民と交流し、地域の発展と活性化にも貢献しているグループホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らさせている (参考項目:30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	昨年9月に理念の再構築を行い職員全員で理念の共有を図った。今後、理念の浸透を図っていくこととする。	ホームが目指す介護サービスの在り方を作成した理念を掲げ、職員一人ひとりが、理念の意義を理解できるように職員会議等で、理念の目的や、ケアの実践にどのように活かしていくか等を話し合い、理念が職員間で、確実に浸透できるように取り組んでいる。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事である、どんど焼きや小学校の運動会等、地域の行事に参加すると共に、併設の地域交流施設でのサロンやもちつきなどに地域の方に参加していただき、地域の方との交流を図っている。	オーナー夫妻が、地域密着型グループホームとして、2ユニット12名の小規模グループホームを、慣れ親しんだ地域の中に立ち上げ、地域の認知症高齢者が安心して暮らせる環境を整え、地域の行事やホームレクレーションに地域と相互協力出来る体制を整えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	施設長が校区のまちづくり協議会の役員を担うと共に、大牟田市によって毎年開催される認知症SOS模擬訓練の事務局メンバーとして、認知症の人の安心・安全のまちづくりや認知症の人の理解の啓発活動を実施している。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	二ヶ月に一回、開催している運営推進会議において、利用者のサービスの状況、評価について報告を行い、意見を求め、サービス向上等、運営に活かしている。	2ヶ月毎に開催する運営推進会議は、ホームの実情を理解してもらい、アドバイスや地域の情報、家族からの要望等を検討し、ホーム運営や業務改善に活かせる取り組みを行っている。また、参加委員にとっても、知識や情報を習得する貴重な会議になっている。	
5	4	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	大牟田市の長寿社会推進課内の地域支援、サービス育成、介護認定担当等のそれぞれの職員とつながりを持ち、必要に応じ運営に関する相談や連携を図り、サービスの向上や地域貢献に取り組んでいる。	行政と協働で毎年開催の、認知症SOS模擬訓練の事務局メンバーとして代表が活動し、地域の認知症に限らず、困難事例や安全対策に取り組み、行政と連携を深めている。また、地域密着型グループホーム(定員12名)として、新規に立ち上げたホームのため、常に行政と話し合いながら、協力関係を築いている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	明らかな身体拘束は、現在までは発生していないと思われる。職員全員が正しく理解していると言いつれない。	外部や内部の研修会に参加した職員は、身体拘束が、利用者にも及ぼす弊害について理解し、「身体拘束ゼロ」を目指し、職員間で言葉遣いや対応に注意し、チェック体制を確立し、身体拘束をしない介護の実践に取り組んでいる。職員間に完全に浸透するまでにはもう少し、時間がかかりそうである。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	「虐待の芽チェックリスト」の記入を毎月実施しており、月に一回真剣に考える機会をつくり、虐待の防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	状況に応じ、ご家族に制度について紹介している。 成年後見人や権利擁護についての研修の機会を提供し、研修参加を促進している。	権利擁護に関する研修会の参加を職員に促し、後見人・保佐人・補助人についての違いを理解し、制度が利用者や家族にとって重要であることを理解している。また、利用者や家族から相談があれば、権利擁護の制度について説明し、申請機関に橋渡し出来る体制を整えている。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、契約内容や重要事項説明について、丁寧に説明し、ご理解の上契約していただくようにしている。		
10	7	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ご利用者の意見を反映させる仕組みとしては、安心介護相談員を受け入れ、実施していただいている。ほとんどのご家族様とは、月に一回は面談し、ご意見、ご要望をお聞きするように心がけている。	職員は、利用者と日常会話の中から利用者の思いや意向を聞き取り、家族の面会が最低でも月1回はあるので、管理者は、家族とゆっくり話し合い、利用者の近況報告や家族から意見や要望、心配な事等を聞き取り、ホーム運営や、利用者の介護の実践に反映させている。	
11	8	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一回、ミーティングの際に職員の意見や提案を聞く機会を設けている。発言しやすい風土づくりに努力している。	毎月職員会議を開催し職員同士の意見や要望が出しやすい雰囲気の中で、活発な話し合いが始まり、意見を集約して、出来る事から始めている。また、オーナー夫妻が、代表と管理者を現場で努め、常に職員とコミュニケーションを図りながら、職員の気付きや心配事を早期解決に向けて取り組んでいる。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人員配置や業務改善を図り、働きやすい環境をつくるよう努力し、一定の改善を図ることができた。		
13	9	○人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	募集・採用にあたって、業務の適正面において、性別や年齢等を検討項目にあげることはあるが、そのことが人権を無視しているとは考えてはいない。「自分自身が幸せではないと良い介護は出来ない」という信念を持ち、職員一人ひとりの自己実現を目指し、共に成長できるように心がけている。	施設長や管理者は、職員の特技や能力を見極め、適材適所に人員配置し、職員が働きやすい職場を目指している。職員の成長を重要事項として取り上げ、外部の研修参加や資格取得のためのバックアップ体制に配慮し、職員が、意欲的に働ける就業環境整備に取り組んでいる。	
14	10	○人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	ご利用者には、心から畏敬の念を持って接するように機会あるごとに伝えるようにしている。 法人代表者は、大牟田市が主催する「人権のまちづくり啓発リーダー養成講座」を修了し、伝達研修を計画している。	利用者の人権を尊重する介護の在り方を、職員会議や学習会の中で話し合い、利用者が持っている個性や価値観を尊重し、ホームの中で、利用者が安心して暮らせる支援に取り組んでいる。また、常に利用者を人生の大先輩として敬愛し、言葉遣いや対応に注意して日々の介護の実践に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員一人ひとりが、介護の仕事にやりがいと誇りを持ち、意欲的に働くことができるように、常に心がけている。毎月社内研修を開催すると共に、外部の研修参加の推進を図っている。また、資格取得のための養成講座受講費の補助も行っている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	大牟田市介護サービス事業者協議会に事業所会員として入会しており、認知症ライフサポート研究会の個人会員入会を促進し、一部の職員は、認知症介護実践塾に参加している。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ご利用当初は、強度な不安があると思われる。この不安を少しでも軽減できるように、笑顔で、目線の高さを合わせ、不安や疑問には誠心誠意、丁寧に対応することが重要であると思う。初期支援の際は、センター方式D-4焦点情報(24時間生活変化シート)にを記入し、少しでも早く馴染まれるように努力している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	止むを得ずグループホームに入居させることを、決断される場合など、家族は、負い目を感じたり、複雑な思いを持っていらっしゃるが多いため、ご家族の思いもしっかりと受け止めるように心がけている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご相談を受けた際に、在宅サービスの利用が適切であるか、施設入所が本当に必要であるか、必要と思われた場合、どのような施設がその方にとって適切であるかなどについて担当のケアマネジャーや地域包括支援センター、その他関係者と慎重に検討し、助言するようにしている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は、ご利用者自身ができる力を発揮されるように共同生活の黒子として、できないところの支援や、趣味や外出の支援、人と人との関係性の構築やその継続ができるように支援していくように心がけている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご家族の支援が必要な場合や、ご家族が支援した方が良い場合もあることを意識して、可能な限りご家族にも携わって頂くようお願いしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	11	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	もともとのかかりつけの医療機関に通院したり、行きつけの美容院に行かれるなど馴染の関係を切らないように努力している。	利用者が昔から大切にしているかかりつけ医の受診や、美容院に同行して利用者の馴染みの関係継続支援に取り組んでいる。また、利用者の家族や親戚、友人、知人の面会は歓迎し、いつでも面会出来るように支援している。また、ホーム入居で始まった、利用者同士の新しい人間関係も大切にしている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食卓やリビングでご利用者同士が居合わせる場面をつくり、必要時は職員が中に入り、互いの関係性を深め、維持できるような配慮を行っている。		
24		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院された時には、家族だけでは困難な場合などにおいて、支援を行い、退院後、契約期間が過ぎても、本人及びご家族が困らないように、できるだけ戻って来ることができるよう配慮している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思の表出が困難なご利用者に関しては、カンファレンスの場であらゆる視点や携わるスタッフ一人ひとりの感性を尊重し、皆の意見を出し合いパーソンセンタードケアの理念を大切に推察し、ケアマネジメントに活かすようにしている。	職員は、日常生活の中から、利用者の思いや意向を把握し、職員間で共有し、介護サービスの提供に活かす取り組みを行っている。また、意向表出の困難な利用者には、家族と相談したり、職員が諦めずに利用者に話しかけ、表情や仕草から、利用者の思いに近づく努力をしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	ご本人やご家族から、これまでの人生をどのように歩んで来られ、現在まで、どのような暮らしぶりであったのかについて、少しずつ関係性を育みながら把握していくように心がけている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	初期支援時、または状態変化時において、アセスメントの方法としてセンター方式のD3焦点情報(生活リズム・パターンシート)D4焦点情報(24時間生活変化シート)に記録し、状況の把握に努めている。		
28	13	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	週1回、カンファレンスを実施し、それぞれの意見を介護計画の作成に反映できるように心がけているが、現在のところ職員のみのカンファレンスがほとんどである。	職員は、利用者や家族とコミュニケーションを取りながら、意見や要望を聴き取り、毎週カンファレンスを開催し、利用者本位の介護計画を定期的に作成している。また、利用者の状態変化に合わせて、家族や主治医と相談し、介護計画の見直しをその都度行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	本人の言葉がある時には出来るだけ逐語録で記録するように心がけている。日常生活の身体に関わる変化及び認知症等による精神面や行動の変化などから情報分析を行い計画の見直しを行うようにしている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その日の心身の状況や天候、職員の対応の状況等により、例えば、急にドライブに行ったり、お花を見に行くなど、即時的に実施するなどの支援を行っているが、まだ十分ではない。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の行事への参加や、ボランティアの方による演芸を楽しんでいただくなどしているが、まだまだ機会も少なく、力の発揮に結び付けるまでには至っていない。		
32	14	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけの医療機関に通院を希望される方は継続されるように支援し、かかりつけ医を探してもらえる場合などにおいては、協力医やその他その方のニーズに合ったところを紹介するようにしている。	入居前に利用者や家族と話し合い、馴染みのかかりつけ医の受診に協力出来る体制を整えている。協力医療機関との連携を図り、利用者の緊急時や定期的な受診も安心して任せられ、看護師や介護職員が協力し、結果をその都度家族に報告し、利用者の健康管理は充実している。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職員とは、情報を共有し連携を図り、協働している。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された場合に、可能な限り早期に退院できるように医療機関と情報交換を行っている。		
35	15	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化された場合や終末期には、様々な条件を整えば可能な限り対応することとしている。	契約時にターミナルケアについて、利用者や家族に、ホームで出来る支援と、病院でしか出来ない支援について説明し、承諾を得て、希望も聴き取っている。利用者の重度化に合わせて、家族と段階的に話し合い、主治医の意見を聴きながら、今後の介護方針を確認し、利用者や家族が、安心して終末期を迎えられる環境整備に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	窒息時の対応として、ハイムリック法などの技術を学ぶ研修やAEDを使った救命処置等の研修を実施した。まだまだ十分ではない。		
37	16	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災消火避難訓練は年に2回実施している。火災以外の災害の対応に関しては、マニュアルを作成している。	毎年2回夜間想定避難訓練を実施し、利用者全員が、安全に一時避難場所に待機し、消防車の救助を待つ体制を整えている。また、近くに川があるので、水害や地震等の対策もマニュアル化し、職員が冷静に対応できるように真剣に取り組んでいる。また、非常食、飲料水の備蓄も用意している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	基本的には、その人を尊重すべきであることは認識心がけるようにしているが、すべての場面において、人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応は、まだできていない。	利用者のプライドや羞恥心、生活習慣に配慮し、職員一人ひとりが自覚し、声掛けや対応、あからさまな介護にならないように注意し、利用者が、ホームの中でプライバシーに守られて、楽しい暮らしの支援が出来るように取り組んでいる。また、職員の守秘義務や利用者の個人情報、漏洩しない取り組みを行っている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご本人の希望や思いを尋ねるように心がけているが、まだまだできていない。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員体制の関係で実施できないことが多い。事業所の都合に合わせていただいている状況も少なくない。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	理美容の手配や服選びを手伝うことがある。		
42	18	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	ごく簡単な下ごしらえや食器洗い、食器拭きなど一緒に行っているが、まだまだできることもあると思う。	利用者の能力や意志を尊重し、料理の下拵えや後片付けを職員と一緒に手伝ってもらい、利用者と職員が、家庭のような雰囲気の中で、楽しそうに、談笑しながら食べる食事は美味しそうで微笑ましいものを感じる。また、職員は、利用者の嗜好を聴いて献立に反映出来るように工夫し、利用者へ食べる楽しさを味わってもらっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	透析治療を受けられているご利用者には、水分量や栄養についてみんなで勉強しながら、調整している。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔の清潔に保つことは大変重要であるので、食後の口腔ケアは、実施していただき、支援が必要な方は、声掛けや、介助し実施している。		
45	19	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	可能な限りトイレでの排泄を継続できるように支援している。	トイレでの排泄やおムツを使用しないで済む暮らしは、利用者の生きる力に繋がると捉え、職員は、利用者の排泄パターンを把握し、声掛けや誘導に工夫し、タイミング良くトイレでの排泄支援に取り組んでいる。また、夜間も出来るだけトイレ誘導を行い、利用者の自信回復とおムツ使用の軽減に取り組んでいる。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄状況の記録を行い、便秘が続くときは緩下剤や座薬等でコントロールしている。		
47	20	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	職員体制の不足により、ご本人の希望の回数や時間帯には対応できていない。	入浴は利用者の希望や体調に配慮し、最低でも週2～3回の入浴支援に取り組んでいる。菖蒲湯、柚子湯などに利用者一人ひとりが湯船にゆっくり浸かってもらい、利用者と職員が楽しい会話で盛り上がり、信頼関係を築いている。また、体の異常や傷などを早期に見つける貴重な時間でもある。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中ベッドで休憩される方は、そのようにしていただき、夜間不穏な場合は、話を聞いたり、不穏が落ち着かれるのを待って休んでいただくようにしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全ての薬の目的や副作用については十分把握できていない。少しずつ学習できるように心がけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	レクリエーションなど行っている。計算や塗り絵、創作活動など行っている。		
51	21	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	職員体制に余裕がないため、以前に比べあまり対応できていない。ご家族様は協力的なご家族もいらっしゃる。	近くの川に鳥や魚を見に行ったり、買い物に出かけたりして、利用者の気分転換を図っている。また、外出レクリエーションを利用者の体調と、職員の勤務体制に合わせて行い、花見やドライブに出かけている。また、家族の協力で利用者と一緒に外食や買い物に出かけてもらい、利用者の生きがいに繋げている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を所持に関しては、持つことの大切さを理解できていない。または、その意識が低い。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族からかかってきた電話を本人に代わることはあった。年賀状を出される際に支援を行った。		
54	22	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居住環境として施設ではなく、普通の家を意識したしつらえになるように心がけている。七夕やクリスマス、お正月など、季節を感じさせる飾り付けも心がけている。	2階建ての木造住宅は家庭的で、1ユニット6名の家と変わらないような造りで、利用者が安心して穏やかに暮らせる温かい雰囲気の共用空間である。また、季節ごとの飾り物を掲示し、利用者が居ながらにして、季節を感じられる工夫をして、一日が楽しく過ごせるように取り組んでいる。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	6名のご利用者であり、ソファでくつろがれる時間と食卓で歓談される時間があり、居室過ごされることもあるあと一か所くつろぐスペースを作りたいと思っている。		
56	23	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自室には、自宅で愛用されていた家具や調度品を持ち込んでいただき、ご自分の部屋であることを印象付けるように心がけている。	利用者が使い慣れた馴染みの寝具や家具、電気製品や鏡、家族の写真や生活必需品を家族の協力で持ち込み、レイアウトして貰い、生活環境が急変しないように工夫し、利用者が安心して暮らせる、清潔で温かい環境を整え、居心地の良い居室である。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所がわかられない方がいらっしゃるのので、ドアに「トイレ」の表示をするなどしている。		